

防災問題における資料解析研究 (30)

河田恵昭・田中哮義・林 春男・
矢守克也・高橋智幸*・川方裕則

*秋田大学工学資源学部

要 旨

巨大災害研究センターでは、所員それぞれの研究テーマ以外に、センター全体に関わる活動を継続し、研究成果のアカウントビリティの向上に貢献している。本年は、1) 巨大災害研究センターセミナー、2) 地域防災計画実務者セミナー、3) メモリアル・カンファレンス・イン・神戸、4) 災害対応研究会、5) 第3回比較防災学ワークショップ、6) データベース「SAIGAI」について内容を紹介する。

キーワード：データベース、巨大災害、比較防災学、セミナー、ワークショップ

1. 巨大災害研究セミナーの開催

2か月に1回、第2金曜日の午後、防災研究所内にてオープンセミナーを開催している。本学情報学研究科の特別講義としても位置づけられている。話題提供者は1名で、出席者は、毎回、当センターの関係教官、学生をはじめ、所内のほかのセンター、部門の教官、情報学研究科の大学院生などであり、活発な議論を重ねている。開催日と講演者名及びタイトルは、以下の通りである。

・第1回 (5月10日)

立木茂雄 (同志社大学文学部教授, 兼. 巨大災害研究センター客員教授)

「草の根検証から復興パネル調査へ、そして参画と協働条例づくりに向けて」

‘From TQM-based assessment of Life Recovery to Civic Engagement Bylaw Formation via Life Recovery Panel Survey.’

・第2回 (8月23日)

林春男 (巨大災害研究センター教授)

Kenneth C. Topping (巨大災害研究センター外国人客員教授)

「WTC (World Trade Center) 災害が今後の防災研究になげかけるもの—New York 現地調査を踏まえて—」

・第3回 (10月11日)

田中聡 (防災研究所総合防災研究部門助手)

田村圭子 (情報学研究科博士後期課程, 巨大災害研究センター配属)

「NY同時多発テロ後のまちの復興を考える新しい合意形成のしくみ ~AmericaSpeaks “4,000人のワークショップ Listening to the City”~」

・第4回 (11月22日)

安国良一 (住友史料館主席研究員, 兼. 巨大災害研究センター客員教授)

「防災組織の歴史的な性格 —江戸時代の火災を事例

に一」

・第5回(1月10日)

川方裕則(巨大災害研究センター助手)

「地震学からの情報・成果を防災へ役立てるために」

2. 第8回地域防災計画実務者セミナー

本セミナーは、自治体の防災担当職員等が都市防災・地域防災についての理解を深める一助として、1995年から毎年開催してきた。

第1回は1995年8月に3日間にわたって開催し、自然災害の外力の特徴を理解すること、災害対策を危機管理の立場から実施すること、およびその事例を紹介することを目的として、講演題目を組み立てている。翌1996年8月に開催した第2回は京都大学防災研究所公開講座に組み込む形で実施した。第3回では地震防災に焦点をあて、第4、5回目は風水害を対象として、第6回目からはさらに自然災害の全般にわたって、充実した内容で具体的な防災対策・対応について紹介し、議論を重ねてきた。2000年から2001年にかけて噴火災害、都市水害、地震災害が発生したこともあり、第6回、第7回は「災害対応を学ぶ」というテーマで、近年の災害に焦点をあてて開催した。

2002年には噴火災害、都市水害、地震災害さらに米国の同時多発テロ事件や大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件などが発生したこともあり引き続き「災害対応を学ぶ」というテーマで第8回を実施した。以下に第8回のプログラムを示す。

第1日目(10月15日)プログラム

12:00 受付開始

13:00 ご挨拶(京都大学防災研究所 巨大災害研究センター長教授 河田恵昭)

●防災基礎講座

13:30(～14:30) 講義 1

「東海・東南海・南海地震」(名古屋大学大学院環境学研究科 教授 安藤雅孝)

14:40(～15:40) 講義 2

「都市水害」(京都大学防災研究所水災害研究部門 教授 井上和也)

15:50(～16:50) 講義 3

「市民との協働とまちづくり」(同志社大学文学部 教授 立木茂雄)

16:50 終了

第2日目(10月16日)プログラム

●市民防災研究所のベストプラクティスに学ぶ

9:30(～12:00) 「災害から命と暮らしを守る具体的な方法」

・ほのぼのあかりのつくり方

・サ・ア・テふしぎな卓上コンロのつくり方

・ポリ袋の応用の仕方

・投てき水バックによる初期消火方法

・煙からの避難方法

((財)市民防災研究所 事務局長 岡島醇)

((財)市民防災研究所 研究員 青野文江)

13:00(～17:00)

●最近の災害対応に学ぶ

パネリスト:「池田小学校児童殺傷事件より」(大阪府立千里救命救急センター 副センター長 甲斐

達郎)、「明石市歩道橋事故より」(京都大学防災研究所巨大災害研究センター センター長教授 河

田恵昭)、「ニューヨーク・ワールドトレードセンタービルテロ災害より」(京都大学防災研究所巨大災害

研究センター 教授 林春男)

コーディネーター:矢守克也(奈良大学社会学部 助教授)

3日目(10月17日)プログラム

●今後の防災の方向を考える

国の動きを知る

9:00(～10:00) 「気象庁の地震に関する情報の現状と今後」(気象庁地震火山部 地震情報企画官 横田崇)

10:00(～11:00) 「地方公共団体の防災力の強化にむけて」(総務省消防庁 防災課長 務台俊介)

11:00(～12:00) 「東南海・南海地震などに関する専門調査会の動き」(内閣府 参事官(地震・火山対策担当) 付補佐 齋藤誠)

12:00 終了

3. Memorial Conference in Kobe VIIIの開催

3.1 Memorial Conference in Kobe VIIIの趣旨

Memorial Conference in Kobe は阪神・淡路大震災を統一キーワードとして2005年までの10年間開催する予定にしている会議で、今年度はその第8回目にあたる。本会議では毎年一般市民・被災者・ボランティア・NGO・行政関係者・医療関係者・研究者・技術者・企業関係者等が分野をこえて一堂に集い、その1年間に見出された学術的成果と、この災害からそれぞれが学んだことを互いに交流し、理解を補

うこと、および阪神・淡路大震災から得られた教訓を21世紀と世界に発信し、安全安心で心豊かな社会作りに貢献することを目的としている。

3.2 会議内容

(1) 概要

本年度は「わたしのマスコミ体験」を全体のキーワードとしてメモリアル・コンファレンス・イン・神戸を開催した。午前中には、一般公募で寄せられた作文のなかから15名の方々に登場していただき、各人に災害時のマスコミとの関わり合いに関する体験や思いを語っていただいた。午後のパネルディスカッションでは、午前中の報告者の中からパネリストを選び、被災地からみた災害時のマスコミのあり方に関するさまざまな議論を深めた。一日の総括を全体討論で行い、「メモリアル・コンファレンス・イン・神戸Ⅷからの提言」を採択した。今回の成果は報告書にまとめて、来年度会場で配布するとともに、インターネットを通して成果の啓発に努める。

(2) プログラム

平成14年度のメモリアル・コンファレンス・イン・神戸は「わたしのマスコミ体験」を全体とテーマとしてとりあげる。被災地からみた災害時のマスコミのあり方に関するさまざまな体験を発表し、一人一人の視点から議論を深める。

①日 時： 平成15年1月18日（土）

②場 所： 神戸海洋博物館大ホール

③内 容

9:30～

開会の辞：新野幸次郎組織委員長

9:45～12:00

テーマセッション「わたしのマスコミ体験」

ご挨拶：京都大学防災研究所教授 河田恵昭

事前に被災地の人々のみずからの震災体験を次代に残すメッセージとして証言する。(1名5分,15証言)～インターミッション～ 音楽：中川博志

13:00～15:15

パネルディスカッション「わたしのマスコミ体験」

コーディネータ：●田中智佐子（毎日放送）

パネリスト：

○磯部康子（神戸新聞社会部）

○加藤律子（震災遺族）

○黒田勇（関西大学教授）

○桜井誠一（神戸市市民参画推進局長）

○矢守克也（奈良大学助教授・震災語り部グループ117副代表）

15:30～16:45

対談「震災8年目のまとめと提言」

●土岐憲三（立命館大学理工学部教授）

○田中智佐子（毎日放送）

16:45～17:00

閉会の辞 土岐 憲三（実行委員長）

※研修室及び廊下に展示場を設け、関係各機関の復興の取組を展示する。

(3) 展示（於：研修室及び廊下）

・2002年災害映像

・これまでのメモリアル・コンファレンスのあゆみ

(4) 15の証言

1)

わたしのマスコミ体験

高 奉 淀（コボンチョン）

阪神大震災時、在日一世の私の自宅も全壊し命からがら近くの朝鮮学校に避難した。学校は比較的無事で大勢の人々が避難してきたのである。

在日同胞の韓国人も朝鮮人もそして日本人もベトナム人も一杯避難してきた。この大震災で兵庫県を中心に在日同胞も二百数十人が死んだ。特にケミカルシューズの町、神戸の長田区は在日同胞が多く住んでいるが震災の大火事でたくさんの人々が焼け出され多くの人が死にまさに地獄絵図さながらの惨状であった。しかしひっきりなしに全国の同胞から送られてくる支援物資と激励の便りに勇気づけられ避難民たちは団結して復興へと立ち上がったのだ。ボランティアの同胞オモニや青年たちが炊いてくれる「トツク」（朝鮮式雑煮）に舌鼓を打ち朝鮮古来の美德である相互扶助の美風のもと大震災に打ち勝つ為に力を合わせ立ち上がったのだ。家はつぶれ家族は死に泣き叫ぶ女子供をなだめ励まし一致団結して復興へと向かったのである。もうそこには国境も無く民族の壁も無かった。あるのは人が人を助ける人間愛だけである。友情の花が咲き国際交流の美談がたくさん生まれたのである。

私はその美しい人間主義と言うか、博愛主義と言うか極限と言える状況の中で心の交流そして人間愛で結ばれた固い絆に感動を抑える事ができず有力新聞に投稿し紹介すると共に支援をマスコミに訴えた。

その結果、二、三の有力新聞に載り取材まで受けたのである。

やがて反響があり全国からたくさんの激励の手紙、電話がある一方、支援金や支援物資を送って下さったのである。私は更に全壊した朝鮮学校の窮状をマスコミを通じ訴えた。

すると又反響があり多くの支援を得ることが出来た。千葉県のある日本の方からは八拾万円という大金を、高槻市の小学校の先生は月給をはたいて参拾万円と言う大金を、和歌山の主婦は今手元に金が無いからと月賦で毎月、お金を送ってくれる誠意には全く頭が下がるのであった。私は過去に徴兵で旧日本軍に引張られ、言うに言われぬ辛酸をなめた。

私は朝鮮語で不満をもらした所、それが教官の鬼軍曹に知られ、なぐられ「朝鮮語を使って何が悪いか」と抗議したら今度は「不逞朝鮮人」だと顔面を蹴られ鮮血が流れた。その傷跡は今も残っている。即ち民族の「ハン」(恨)を背負って生きて来たが大震災時の人間愛の極地とも言える友好親善の心の交流は私の民族の「ハン」(恨)をも吹き飛ばしてくれたのである。かくして在日同胞と日本の皆さんの団結の力は遂に朝鮮学校の再建も成しとげ在日同胞の子弟らは新校舎(東神戸朝鮮初中級学校)で嬉々として勉学に励んでいる。これは大震災を通じ打ちのめされた被災者の状況をいち早く報道し勇気づけ支援を訴え自らもその先頭に立った我らがマスコミの奮闘のおかげだと思う。生きた証拠である。その意味で正義のペンを自由に真実を大胆に勇気を持って前進するマスコミなれ。

2)

地震災害報道に関するマスコミの非常識

野田 弘

はじめに

およそ8年前の兵庫県南部地震では、6,400人余の死者、大火災、ライフラインの大損壊等という未曾有の災害を被った。『関西では大地震は発生しない』という非常識を蔓延させたマスコミ関係者の振る舞いは、断じて許すことは出来ない。

庶民は、意識しているか、意識していないかに拘わらず、マスコミ報道に強く影響されているし、行政担当者も無意識的に非常識を当然のこととしてきた。将来における地震防災・減災を目的として、問題点を提起する。

1. 東海大震災説

昭和50年代の始めに、石原克彦氏(当時は、東大助手)により、“東海大震災はいつ起こっても不思議ではない”という学説が発表され、これを契機として『大規模地震対策特別措置法』が制定された(昭和53年12月施行)。東海～関東地方では、民間企業、行政機関、地域住民が地震対策の整備をはかり、筆者も関東～東海～近畿地方の幾多の事業所の地震防災診断・対策提案を行ってきた。

2. 関西ではどうだったか?

東海大地震の発生に際しては、関西では震央距離が200～300kmと考えられるから、地盤が大揺れするものの直接的な大被害は起こり得ないが、関西近辺での大地震発生の可能性は否定できないとして、社会的に種々の場で訴え続けてきたのである。

たとえば、大阪市内の事業者に対する地震防災講演(大阪商工会議所主催)、事業所の地震防災診断、(社)日本技術士会での震災対策の必要性の啓蒙を図ってきた。さらに、兵庫県庁・神戸市役所・明石市役所の消防防災課へ地震防災対策の提言を行ってきた。しかし、これらの行政機関の発する反応は、異口同音にして“関西では大地震は起こらないよ”と言うものであった。

これらの発想は、地球科学的な歴史的事実に基づくものではなく、多くのマスコミ報道が非常識を暗に流布させたものに依っているものと考えられる。

3. 最近の関西近辺での地震発生

忘れてはならない、あるいは伝承し続けなければならない関西近辺の大震災を列記すると以下のようなものがある。

1916年11月26日(大正5年)

淡路島北端の地震 M6.1 (1995年1月17日の兵庫県南部地震とほぼ同じ震源)

1925年5月23日(大正14年)

北但馬地震 M6.8

1927年3月7日(昭和2年)

北丹後地震 M7.3

1936年2月21日(昭和11年)

河内大和地震 M6.4

1943年9月10日(昭和18年)

鳥取地震 M7.2

1944年12月7日(昭和19年)

東南海地震 M7.9

1946年12月21日(昭和21年)

南海地震 M8.0

1948年6月28日(昭和23年)

福井地震 M7.1

1952年7月18日(昭和27年)
吉野地震 M6.8
1984年5月30日(昭和59年)
山崎断層の地震 M5.6
1995年1月17日(平成7年)
兵庫県南部地震 M7.2

このように、わずか100年足らずの間に11回の地震被害があることを、ジャーナリストもマスコミ関係者も熟知しておくべきことである。これらの地震に際しては、人的被害・物的被害・土砂災害が多発していた。兵庫県南部地震においては、震源からの直達波による被害ばかりでなく、この直達波と反射波の共鳴が生じて、これらの複合波(乱波)や重複反射波による被害が特徴的である。たとえば、神戸市東灘区では複合波による地盤の圧縮・隆起(部蛇)が起り、三宮周辺では重複反射波により多数のビルの中層階が壊滅した。

現時点の技術水準では、地震がいつ発生するかを予知することは出来ないが、いつ発生したとしても、マスコミは被害を軽減すべく常日頃から地域住民を啓蒙する責務がある。

4. 防災情報のあるべき方向性

筆者は、20数年前に『防災情報を日常化せよ』と提案した。天気予報に関しては、ラジオ・テレビ・新聞を通じて毎日々々何度も情報が提供されている。これと同様にして、地震災害のみならず、各種の自然災害に関わる防災のための緻密な情報を、マスコミは市民に連日提供しなければならないということである。

たとえば、鹿児島では桜島の噴煙予想方向を図解して新聞・テレビが報道し、また長崎県島原では雲仙普賢岳の溶岩流の動向を図解して報道していた。

自然災害や防災対策に関してのテクニカル・タームは、ともすれば理解に苦しむものが多く、市民にはその語の概念が必ずしも受け入れられているとは言いがたい。筆者は、マグニチュードと震度について、電球のワット数とこれにより照らされた壁の明るさで説明し、またプレートテクトニクスについては『野田のミソ汁理論』で解説している。

防災意識の向上は、まず“災害に親しむ、仲良しになる”ことが大原則である。そのためには、マスコミを通じて、的確な自然現象の観測・調査データの報道、ならびに専門用語の平易な解説が日常化されなければならない。ジャーナリストは、事が起こってから立ち上がるのではなく、大惨事が発生する前に、為すべき取材・事前調査とその的確な報道を心掛け

ていただきたい。

【参考文献】

1. 野田 弘 “地震防災と情報に関する課題” 「情報管理 Vol. 23 No. 12 1981年3月」 (特) 日本科学技術情報センター
2. 宇佐美龍夫 “新編 日本被害地震総覧” 1987年3月 (財) 東京大学出版会
3. 活断層研究会 “新編 日本の活断層 分布図と資料” 1995年3月 (財) 東京大学出版会
4. 野田 弘 “乱波部蛇対策を急げ” 「技術士 No. 331 1995年9月」 (社) 日本技術士会

3)

わたしのマスコミ体験

中村治助

震災時にマスコミが大きな力を発揮した事は事実ですが、苦言を呈したいこと、一言申し上げたい事が多々ある人が大勢いることも事実です。私もその一人です。

私は自宅全壊、母親は即死。遺体の安置所場所も住むところもありませんでした。当時、神戸市会議員の立場で我が家のことは家族にまかせ、被災者の救出、避難所訪問、復旧作業等に連日、フル回転でした。当時は、マスコミは現職議員で最も被害の大きかったということで、連日のように取材攻勢にありました。取材そのものより内容、取材態度に憤りを感じました。市内を駆け巡っている最中に携帯電話で、私的な質問攻めです。その都度、喧嘩です。作業現場、議会、満員のバス、昼夜を問わず押し掛けて来ました。更に許せなかった事は、一部の非常識とも思われる市民や国体？のパフォーマンス大々的に取り上げ英雄扱いだが、一方で影で苦勞して被災者対策に取り組んでいる人々。国など関係方面に陳情、要望活動に真剣に取り組んでいる市当局、議会、各種団体の事は一切無視、こちらから指摘しても反応がありません。

このような取材姿勢は、どうしても納得が出来ず、抗議しても弱者の味方、とのことです。マスコミの報道如何により、弱者の位置が逆転する可能性すらあると思います。事実記事により、善良な市民が混乱したり、扇動されたり、正しい退職が出来なかったりします。大多数の市民は、新聞の記事を絶対正しいものと信じるのです。このようなことは、皆様方は百もご承知の事ながら、世間では特にマスコミ関係者は同じ事をいつも繰り返しています。マスコ

ミの影響力、社会的使命を再認識されることを、声を大にしてお願いしておきたいと思います。

4)

私のマスコミ体験—伝えられたこと、伝えたこと— 矢守克也

私は、震災に関して、マスコミと2つの方向で関わりをもったことについて話したいと思います。第1は、私がマスコミの側から伝えられた体験、言いかえれば、情報の受け手としての関わりです。第2は、反対に、私がマスコミの側に伝えた体験、言いかえれば、情報の発信者としてマスコミと関わられたかなと感じていることです。

さて、私は、大学に勤めている者、しかも、災害心理学を専門にしている者です。よって、世間から見れば、私は、研究者あるいは教育者として、震災に関わったと思われるかも知れません。たしかに、そういう面がなかったわけではありません。また、専門家の端くれとして、プロとして震災に関わることが責務であると感じていました。しかし、それと同時に、同じ関西に住む者として、あるいは、豊中市にある自宅（両親の実家ですが）が大きな損害を被った者として、専門家や研究者である前に、一人の市民として、あるいは、一人の人間として、震災という出来事に向き合いたいと思ったことも事実です。そして、その気持ちは、今も続いています。

一人の市民に立ち戻ったとき、つまり、研究者や専門家といった仮面を剥ぎ取られたとき、頼りになるのは、やはり、一人の市民、一人の人間として同じような考えをもって震災に立ち向かっている方々の存在です。こうした方々との連帯・協力が必要です。そのためには、まず、そのような方々の存在を知らなければなりません。私が、2つの方向でマスコミと関わったのは、このような状況下でした。

具体的な例を見ていただきます。まず、マスコミの側から伝えられたこと、です。むろん、たくさんあるのですが、現在の私に大きな影響を及ぼしている点では、この2つが双璧です。

【新聞記事1：朝日新聞 1999年12月1日付】

【新聞記事2：朝日新聞 2000年1月18日付】

新聞記事1を通して、それ以前から、研究者として、また、一市民として震災体験の風化に危機感を覚えていた私は、被災体験を語り継ごうとしているボランティアの存在を、初めて知りました。そして、5分後には、この記事に紹介されている電話番号に

電話をかけていました。電話をとって下さったのが、今でも、私が一ボランティアとしてメンバーに加わっているグループ「語り部グループ 117」の代表長谷川忠一さんでした。また、新聞記事2では、演劇という芸術活動を通して、同じ課題に取り組んでいる劇団の存在を知りました。この劇団の代表細見圭さんとも、その後、ずっとお付き合いをいただいています。このような出会いは、マスコミなくしてはありえなかったと、私は今でも思っています。

次に、発信する側として、マスコミに関わった体験です。

【テレビ:NHK クローズアップ 現代(2002年1月15日)】

【新聞記事3：神戸新聞 1995年4月5日付】

【新聞記事4：読売新聞 1995年5月27日付】

テレビの方は、先ほど紹介したグループ117の活動を取りあげてもらったものです。この番組によって、私たちの語り部活動の存在を全国の方々に知ってもらうことができました。番組以後、活動の範囲が全国へと広がりました。関東、東海、四国など、今後、巨大地震の発生が危惧されている地域の方から、阪神大震災の体験を聞きたい、という依頼が数多く寄せられるようになったのです。さらに、番組制作の過程で、私は、マスコミの内部でも、災害、震災をいかに伝えるかについて、多くの議論が交わされていることも知りました。たしかに、マスコミは、被災者や被災地を知らない（面がある）かもしれない。マスコミ報道については、多くの問題点が指摘され、現在でも解決されていない点もたくさん存在すると思います。しかし、逆に、われわれ市民の側は、マスコミの内部をどのくらい知っているのか。心許ないと言わざるを得ません。同じ人間にしていることですから、当然、批判すべき問題点もあれば、評価すべき美点も存在するでしょう。でも、知らない（無知）、というのは問題だと思います。

新聞記事3、4は、いずれも震災から3ヶ月が経過する以前の時期のものです。当時、私は、芦屋市内でボランティア活動をしていました。そのころ、ようやく建ち始めた仮設住宅に住む方々の生活支援が、活動の主な目的でした。ご覧のように、仲間と実地調査をして、その結果を提言の形にまとめて、ボランティア団体や、市の担当者の方にレポートしました。そして、この報道がきっかけとなって、ボランティアに加わってくれる人、同じような活動に取り組んでいた別の市区のボランティアの人が急増したことをよく覚えています。これも、マスコミ報道の力だと感じます。

まとめます。最初に、私は、震災に関して、マスコミの方々と2つの方向で関わりをもったと述べました。一つは、情報の受け手として、もう一つは、情報の発信者として、でした。ここで、いずれの場合も、マスコミのバック（背後）には、市民やボランティアの地道な活動があったことを強調したいと思います。つまり、マスコミを仲立ちとして、少なくとも、私は、同じ思いをもった別の市民やボランティアの方々と知り合い、協力しあい、お付き合いを続けることができるようになったわけです。もちろん、災害時にマスコミが果たすべき役割は、他にもたくさんあるでしょう。でも、その中の重要な一側面として、以上述べてきたような働き、つまり、市民と市民、ボランティアとボランティアを繋ぐ役割があると私は信じます。

災害は、起こらないのが一番です。が、巨大地震一つとっても、最新の研究成果によれば、残念ながら、永遠に起こらないことはありえないと考えねばなりません。次に大きな災害が起こったとき、マスコミが、なおいっそう、われわれ市民の頼れるパートナーとなってくれることを期待して、私の体験談を終わらせていただきます。

5)

わたしのマスコミ体験

加藤律子

人類の長い歴史のつながりの中で私達は今生きています。子どもはそれを未来へつなぐ継承者であったのです。この社会の中での一員として、自分の役割を真剣に考え、実践して生きていた息子が、突然生命を断たれてしまいました。21年間大切に育んだ肉体と精神を駆使し、努力して培った英知が、一瞬にして灰になったのです。受け入れ難い息子の死。しかし、親が代わってやることもできない。この事実を、身悶えして受け入れるしか、私達には選択肢が無いのです。その現実を直視せざるを得ない告別式を終えて1週間後、神戸大学震災犠牲者追悼特集として、私は某新聞社の取材を受けることになりました。肉体は天に召されても、魂だけは生き続けて欲しいという親の願いが、取材を受ける最大の要因でありました。息子は高校時代から国際貢献を目標に掲げ、研究し、学習を重ねながら、後継者の育成をも考えていました。志を遂げることなく逝った彼の魂を、誰かの心の一部にでも宿して頂くことができれば・・・と儂い願いで、取材に応じたのです。

幸い、大学特集としての取材であった為に、息子のことを詳細に聞いて下さったので、私の気持ちとしては、前向きにお応えすることができました。又、息子と年齢が近い女性記者の誠実な人柄に応えたいという思いもありました。「何かエピソードがあったら教えて頂けませんか」という質問に、息子が大学へ入学する時、私に書いてくれた手紙を彼女に読んで頂きました。その手紙が全国紙に掲載された結果、大きな反響を呼びました。私は、この8年間、多くの取材を受けて参りましたが、マスコミに対して、怒りや嫌な思いをした経験はありませんでした。それどころか、取材を通して出会った方々とは、今も交流が続いております。全国に伝えられた息子の手紙は、忘れかけた人間の心呼び戻し、取材を受ける私の防波堤となりました。薄氷のように、もろく傷つき易くなった私の心を、しっかりガードしてくれたのだと思っています。私のように、子どもを亡くした親にとっては、その子の人間性や、生き方等を重点的に取材し、報道して下さったことは救いでした。遺された者の悲しみを全面に出されることは、取材を受けた親は、辛く、傷つきます。私も親ですから、我が子を亡くした悲しみはもちろんありますが、それ以上に、社会の大切な人材を失ったことへの無念が強いです。私のような立場や、思考を持つ親には、お涙頂戴的な報道には、否定的な見方があります。息子は、たまたま、文章や言葉で表現することが苦にならない人間でしたので、こうして、手紙を残していますが、この内容は、全ての子供達の願いではないでしょうか。亡くなった人への尊厳と、事実には忠実な報道をして頂きたいと、切に願っております。

6)

「わたしのマスコミ体験」

大江 浩

1995年1月17日、午前5時46分。それは私の「それ以前」と「それ以降」を劇的に変えた出来事であった。「それ以降」の道のりは「それ以前」の私の想像外だ。「それ以降」私は、物覚えがよくなった。世界各地の災害や紛争の度に、その日時を克明に記憶した。時を（心深く）刻む。そして時系列的かつ歴史的に自分と社会の動きを捉え、命の足跡を辿る。それは6,432名の尊い命の礎として私は「生き残っている」という証しだろう。

本題である私のマスコミ観を述べたい。第1に、

概観。震災以降の地元メディアは、他のメディアとは異なる視線で、市民の地平から捉え様々な事柄をつぶさに知らせた。また震災を契機として生まれた多文化・共生の文化を産み出していく担い手の一人として働いてきたように思う。ともすれば、当時の各種メディアはボランティアの光と影の「光」の部分（美談）だけを映し、人々の涙腺を揺さぶった。他方、地元メディアは教訓と検証を、知恵と力のネットワークに高めていく冷静かつ地道な努力を怠らなかつた、と感じている。

第2に、私自身の国内外の災害や紛争の現場体験からの感想。世界各地の出来事をリアルタイムで知らせるグローバル化の時代の到来—しかし、情報発信される内容はすべてが実像とは言い難い。それらは、時に恣意的に操作された情報であったり、むしろ「報道されないこと」にある信実が隠されている時すらあるのだ。災害報道は「より新しく大規模かつ悲惨な状況」を追いかけて、その一つ前の災害は、「過去」としてニュースの価値を失い、忘れ去られる。被災者が被災の故に深く傷つき、「忘れ去られる故に」再度傷つくことを自分たちの体験に引き寄せて考えたい。私たちは「過去」ではなく、「現在」なのだ。人々の記憶・経験知とそこから築かれる震災文化の創造を目的として、人々が気づき・学び・行動し・支え・広げ・深め・繋がり・関わっていくためには、やはりその原点とも言える「知る」ことが起点になる。その「生きた情報」の重要な部分はマスメディアが担っている。

『情（しらせ）』を『報（しらせ）』るものでしかなかった『情報』は、『情（こころ）』に『報（むく）』いるものでもあることに、たくさんのわたし・たちが目覚めた。」と9.11に触れ、池田香代子さんは語る（「世界がもし100人の村だったら②」マガジンハウス）。

私は実感している。メディアはまさに、私たちは「何故、誰と共に、誰のために生きるのか」という本質的な自問自答のための「触媒」の働きをし、またあるべき「道」を「報（しらせ）」せていく使命（ミッション）を担っているのではないかと。そしてそれはとりもなおさず、私たち一人ひとりへの鋭く深い問いでもある。「震災を忘れない」という原点から離れず、その時々に必要なことを具体的に記憶に留め、あるべき姿を導き出し、そして「震災」から離れていく（発って行く）営みにおいて、メディアと市民の良質なマスコミュニケーションは欠かせない。失敗と成功を経て、協働により知を新化・深化・進化

させていくこと、それが私たちに与えられた使命なのだ、と思う。生き残ったものの務めとして。

7)

わたしのマスコミ体験

野村純子

私たち情報サークル“いい輪”は、1987年から新聞の切り抜きを通じて得たその時々テーマで、アンケートをしたり、講座企画、冊子作成という形で情報発信をしてきました。95年の大震災では、宝塚も大きな被害を受けました。阪急今津線では宝塚を出た電車が、武庫川を渡る鉄橋の上で脱線、傾いていたし、私の住む売布、中山地域でも道路が割れ、電柱が傾き、古い家並みが倒壊して死者も出ていました。震度7だったのです。そしてインフラや交通手段が途切れた中で、私たちは情報の大切さを痛感しました。

しかし、テレビにも新聞にも「宝塚に関する情報」はほとんどありませんでした。震災直後から、傾いた高速道路と長田、鷹取地区の映像、情報ばかり、マスコミは定点観測のつもりだったのでしょうか？ そのようなマスコミの報道に、宝塚にいる私たちは、取り残された感じを強くしました。天皇皇后が宝塚の体育館に被災者のためというより、被災地以外の人々に被災地の様子を知らせることに重点を置いていたとしか思えません。現場の記者が取材しても、編集するのが被災地以外の人だったのです。

そんな中私たちは、宝塚の人たちが災害時にどのように、どのような情報を得ていたのか、又その情報のあり方に対する思いについてアンケートを行いました。アンケートの結果、市民があらためてそれぞれのメディアの特性に気づいたことが分かりました。速報性、映像の力で見せるテレビ、身近なロコミ。そして人間関係を含めているいろいろな情報手段を確保しておくことの大切さを痛感しました。あの震災経験からその後全国各地に地方FMラジオ局が続々開局したことは一定の成果といえます。

しかし私たちが、あの時最も強く感じたことは「情報の偏り」です。宝塚の情報が少なかったこともあります。また支援物資がマスコミ報道された所に集中しました。一方で赤ちゃん用品や介護用品などの特別な物は、夫々それを必要としている人のいる所に届けなければいけません。そうしたきめこまやかな情報は必要としている人自ら発信するのが一番なのです。そこで私たちは、双方向性の情報、被災者

自身がどんどん情報を出していける情報ツールとしてのパソコンに注目しました。そして宝塚に情報ボランティアネットワークを立ち上げ、まず市民にパソコン操作の講習やインターネットのデモンストレーションをしました。さらに宝塚市のホームページに避難所マップを作成、今年度は個人情報のセキュリティの講座を予定しています。

今では携帯電話が普及してきました。自治体や自治会にはホームページもあります。これからのマスコミ従事者は、ジャーナリストのプロとして情報ボランティアには出来ない「なにか」を磨かなければならなくなるといえるでしょう。

8)

私達の阪神大震災

吉田晃巳

私は、阪神大震災の時まだ一歳十ヶ月だったのであまり覚えていません。でも家がこわれて、西宮中央体育館で何日かすごしていた時の私が新聞やざっしにのっています。私の家には、その時の新聞やざっしが今もあります。私は、今その時の自分や家族、もえたりくずれたりしている家を見て本当にまじ全体がかなしそうでたまりません。私がひなんした体育館もステージの上まで人がいっぱい、そこに近所の人たちがねとまりしています。私は、今小学四年生です。ちょうど私くらいの子どもが食べ物ももらったり、ポットに水をくんでほこんでいる写真もあります。おばあちゃんの家が神戸にあります、西宮と神戸の間の電車は、どれもつかえなかつたのでおばあちゃんは、船で西宮まで来ました。私と同じマンションにいた友だちは、たおれてきた家具でケガをしましたがなかなか病院に行けず、そして病院に行っても十分な手当をしてもらえなかつたそうです。それがどうしてなのか、それも今その時の様子を、うっした写真を見ればわかります。

震災の時の私は、まだ何も分からない赤ちゃんでしたが、体育館にひなんしていたことやその後、静岡県浜松市のいとこのところへ、母や姉としばらくひなんしていたのを少しだけ覚えています。新聞やテレビの人が、私達のことを記事にして書いてくれたり、ビデオに記録してくれたおかげで、あの時の様子を思い出すのできるのです。

あの時写真や新聞記事は、私の忘れてはならない大切な大切な記録です。

あの震災からもうすぐ八年がたちますが、これか

らも、あの時起きたことをずっとずっと、くり返し多くの人に伝えてほしいです。

9)

「ぬちどう たから (命こそ宝)」

田口博之

縛られた俣、重石を付けられて、ズーンと突き上げられた不気味な体感。これが7年目の「阪神・淡路大震災」との遭遇だった。

呆然としている妻に以上がないのを確かめて早速ラジオのスイッチを入れた。放送から地震情報が流れ始めたが、新年の余韻が尾を曳いている上に未明の社内体制からの情報は要領を得ないものが多かった。

ガス・電気・水道、そして電話と次々ストップ仕始めた。わが家は、岩盤の上に建てられた中層団地の一階でもあり、食器や本棚が割れたり散乱した以外はさしたる被害が無かった。電話が不通になる直前に、離れて暮らす息子達と安否確認が出来たのは幸運だった。

既に定年退職していて、いわゆる失業保険で暮らす身分だったから、元の勤め先や友人知人の安否を調べたり結びつけたりする事に専念した。都心から少し離れて地域だったが火事の発生が焼けたゴミを運んで来出した。

□私の死生観の再点検

古希をとっくに越しているが、私は少年期を旧満州で過ごした。敗戦から引き揚げまでの一年余りの間、恐らくこれは地獄だろうと思う無惨な光景をいやと言う程見聞きしてきた。私の身内では生きていたら還暦に近い弟一人を喪ったが、小学・中学の同窓のうち戦後 50 余念で消息がわかったのは三割に満たない。「いのち」へのこだわりと感謝を、震災との遭遇によって、改めて実感させられたと言っても良い。

□遺体の収容に立ちつくす

偶々私は職業にマスコミを選んできた。様々な事件・事故現場にも踏み込んできたが、自分も現場に出向いて被災者や近所の人々の遺体収容場面に何度もあった。記者根性が頭をもちあげ、何度もカメラを向けてみた。震災2日目の白昼、狭い露地の奥まった長屋で遠慮がちに操作されている小型ショベルカーの鈍い響き。茫然と立ちつくす遺族と隣人たち。

意気込んで構えたカメラは、結局一枚もシャッターを切ることができなかった。

□神戸脱出で息子達と激論

地震発生から三日目。東京で働いている息子2人が、空路岡山経由、レンタカーを買って飛びこんできた。即刻東京避難を主張する。

神戸滞留を言い張る私と妻を相手に、息子達は血相を変えて、東京行きを固執し、結局“子に従う”ことになった。

約1ヶ月、被災地・神戸の震災レポートを東京で横目で睨み乍ら焦りや不安の中で辛抱を強いられた。

□震災地・神戸へ帰る

神戸へ戻る空路で、眼下に見た輝く富士、火災が街並みを変えた神戸上空、そして地上を走るJR神戸線の明石天文科学館の落下寸前状態の標準時計が今もありありと蘇える。

そして私は、放送で聞いた兵庫県の災害復興エフエム局のボランティア記者で飛び込んだ。何故か沖繩の格言が耳から離れない。

10)

ヘリの音

芦田多佳子

道路や建物の模型をひっくり返したような衝撃的な震災の報道の影で、見えない記者達の苦勞の一端と震災直後の記者クラブの様子を紹介したい。

家の大きな揺れで目がさめ、布団を頭から被って、揺れに耐える時間が非常に長かった事が、印象に残っている。そして揺れが収まったとたんに自分の仕事が頭をよぎり、TVのスイッチを入れると同時に、出勤の用意をした。

当時、私は近畿地方建設局の広報担当であり、畢竟、近畿建設記者クラブを担当していた。記者クラブは、新聞・テレビ等19社が加入し、近畿地方建設局の他、関係公団等9組織が参加している。こういう非常事態時の情報発信は最重要の仕事である。

電車はいつ来るかわからない状態で、とりあえず来た電車に乗ったが、乗客はあんな悪夢のような事態になっているとは誰も想像しておらず、予想していたより楽観的な様子だった。

局に到着した時、記者クラブにはまだ記者は一人も居なかった。

そのうち担当記者ではない、初めてみる記者がやってきて、何か情報をくれというが、対策本部が設置された直後で、まだ何の情報もない。やいやいとせつかれて、当方も情報が欲しいので、兵庫国道工事事務所にマイクロ電話した。やっと電話がつなが

り、阪神高速道路が事務所の玄関の所に倒れてきていると聞いたとき、初めて事の重大さを、その記者と共に知った。

その日に、野坂建設大臣がヘリコプターで現地視察され、夜の9時から局の一室で記者会見を行った。大臣は炎に包まれている神戸がずいぶん衝撃のようであった。そしてその会見の間も神戸の街は燃えていた。いつもの担当記者はほとんど居なくて、ほとんど応援の記者だったように覚えている。

当時、記者クラブの世話をしていた女性も、長田区の人で、家を焼失し避難生活に入ったため、私は孤軍奮闘状態で、体がいくつあっても足りないような日々の始まりとなった。しばらくして、弁天町から船に乗って避難先の小学校へお見舞いを届けたが、彼女は二度と記者クラブには戻ってこなかった。

応援の記者達は、各社が宿泊所が用意されていたが、中には泊まるところのない記者もあって、宿泊所探しの電話を随分したが、日に追うに従い、全然取れなくなった。

そのころ、やはり自宅が被害にあったS記者が、家族を奥さんの実家に預けて、リックを背負いクラブによろやくたどり着いた。怪我をして帰る家も

11)

マスコミは夢の応援団

荒井 勲

私にとってマスコミは、夢実現の応援団でありパートナーです。マスコミの協力で、幾つもの夢を実現させて来ました。

私が初めて新聞に載ったのは、平成4年夏で、青少年健全育成の目的で子供たちとひまわりを咲かせ、迷路を造って楽しんでいるといった、読売新聞のカラー写真付きの記事でした。この記事に、社会がこの「ひまわりの花いっぱい運動」を認めてくれていると、とても勇気付けられると共に、発信者側にいる自分を知りました。

以来マスコミを、自分たちの活動に社会に理解してもらう為の良きパートナーと思う様になりました。

夢実現の協力事例を一つ紹介します。私は平成6年春から、子供たちと何か大きな夢を実現させて、生きる素晴らしさを共に味わいたいと思い、組み立て式の迷路を出前する傍らで、はがきサイズのひまわりの絵を集めていました。たまたま迷路の取材に来ていた神戸新聞の記者に、「絵が一万点集まったら、ゴッホのひまわりと一緒に飾って展覧会をした

いねん」と、冗談交じりで夢を語りました。するとその記者は、「そっちの話の方が面白い」と、私の夢に、じっと耳を傾け、メモを取って帰りました。

その翌日、朝刊を広げてびっくり、なんと大きな見出しで「ゴッホの名画と並べたい・・・1万点集めて展示会目指す・・・」と、書かれていました。しかも住所、氏名、年齢まで書いてあります。「家のプライバシーは、どうなっているの」と嘆く家内を尻目に「やるしかない」と、心を決めました。

汗を流した結果、集めた絵はその年の暮れには9千点を超えました。これは大変だ。子供に嘘はつけないと、ゴッホのひまわりを所蔵する東京の安田火災本社に、絵の神戸展示を願い出たが答えは当然の事のように「NO」でした。

困り果てた所で年を越し、阪神淡路大震災に遭遇しました。私自身も被災しましたが、日頃の地域活動が生き、地元ボランティアとして支援者側に立てた事が何よりも幸せでした。

半年を超えるお風呂の出前と避難所の支援、その傍ら「瓦礫の町にひまわりを」と、大量のひまわりの種を配布しました。多くのマスコミが種の配布を取り上げてくれたおかげで追い風が吹き、夏になると大輪のひまわりが被災地のあちこちで咲き、話題になりました。

そして、追い風が吹き寄せられるように私の元に子供たちの絵が集まり、1万点のつもりが2万点になり「おじさんゴッホは？」と、迫ってきました。私に金はなく、出せるのは知恵だけと、絵の一部を持ち再び安田火災の本社へ行きました。

「2万人の子供たちには4万人の親がいます。被災地神戸で、揉め事はありません？市民の敵ではなく味方になってもらいましょう」苦悩の顔の担当者にすかさず、「ゴッホを動かさなくても、私たちの絵をこちらに運び展示会をさせて下さい」と、提案すると担当者に笑顔が戻りました。やがて役員会でこの件が承認され、1997年の夏休みの1週間、「ゴッホに挑戦・夢のひまわり展」は、無事開催されました。そして美術館の休館日、子供たちと一緒に、ゴッホの絵の横にみんなの絵を飾りました。私たちの夢実現の瞬間は東京のマスコミ各社から全国に流されました。特に、NHKお昼のニュースの最後に、「所で、いま新宿の安田火災では、神戸の子供達の描いた2万点のひまわりの絵が飾られています・・・」全国に流された映像には、名画「ゴッホのひまわり」の前で、神戸から持ってきた絵を掲げる子供たちとひまわりオジサンの快心の笑顔が映っていました。

震災から8年たちました。いろんな事がありました。事実を伝え続けるマスコミの皆さんに感謝の意を表すると共に、夢を育む社会作りの応援団であり続ける事をお願いします。

私は現在、人と防災未来センターで、語り部ボランティアとして体験を語り続けていることをご報告させて頂き、話を終わります。

12)

わたしのマスコミ体験

泉 万紀子

「マスコミ体験」作文募集と書かれた記事の隣りの新聞記事に、かつて一緒に仕事をした堀内正美さん企画の交流ウォークの地図が載っていました。

私がニュースに登場した際、一緒に居た俳優さんです。そこで、報道陣に囲まれて、マイクに向かって、「中野万紀子です」と、自己紹介したことがありました。震災で助けてくれた人々に、もう一度お会いしてお礼をいいたい・・・という気持ちを伝える受付係の仕事をやっておりました。

受付をしていた時、「インフォメーションはどこですか。」と尋ねられ、ふと顔を見上げると、マスコミによく登場される皇太子様とそっくりな方で驚いたことがありました。その時、報道陣に囲まれていなかったのも、他人のそら似だと判断しました。

ニュースが流れた時、私の姿をブラウン管で見つけた親は、驚いていました。

「NHKに出るなんて・・・」

震災当時の早朝ニュースで関東に住む兄が神戸で地震が起こったそうだが、大丈夫かと電話で安否をたずねてきました。地震の起こった数分後に、兄からの電話が入りました。既に全国に知れ渡っていることを被災した者が知った時、その伝達の早さに仰天しました。そのお陰で助けてきてくれた人が現れて下さったのだと感謝しています。

震災直後のマスコミで、当時勤めていた病院に運ばれた怪我人が死亡と報道されていたのを目にしました。私は欠勤していても病院は普段と変わらず運営されていることを知り、出勤せねばならないとの義務感が湧いてきました。病院スタッフとしては、普段何の役にも立たなかった私でも、使命感に燃えて仕事に向かいました。

これもマスコミがあったればこそ。知らせてくれる人々の存在感をひし、と感じました。

13)

私のマスコミ体験

桜井誠一

当時、神戸市の災害対策本部で広報課長をしていました。

私の仕事は事件、事故の際には、マスコミの対応窓口になることから、ポケットベル（この当時はまだまだポケベルでした。）を常に持たされて24時間精神的に拘束される仕事です。

この日も習性から、地震発生からすぐに、背広にネクタイ、リュックにバナナとパンそして2日間の着替えを詰めて、自宅を飛び出していました。

このようなちぐはぐな姿は、自宅が無事だった半面、表現できない異常を感じた結果だったと思います。市役所に到着して、まず行動したことは、災害対策本部の情報センターを立ち上げることでした。市民への情報伝達の手段が断たれていることを知った瞬間から、押し寄せてくるマスコミのメディアを利用させてもらうことを考えました。そのため、災害対策本部の中にホワイトボードで仕切った記者会見室を設置しました。

このことで、マスコミからずいぶんと助けていただきました。反面、大変なことも多々ありました。記者会見室といっても通常とは違って、NHKの生活情報放送センターの機能や各社のTV中継も行われ、まさに24時間眠らない部屋です。また、この中や廊下でマスコミと一緒に寝泊りするなど「たこ部屋」状態で、衛生上も問題ありの世界でした。震災当日から10日間ほどで約800人のマスコミであふれかえりました。この状況はだんだんと落ち着きましたが6月末まで続きました。

この部屋は24時間監視カメラの中で生活をしているのと同じ状態です。職員は緊張状態が続きました。疲れて机に突っ伏しているところやタバコを吸っているところをTVに映されると同時に、「何をのんびりしとんや」と電話が殺到。笑っていなくても、話す時に「歯」が見えると笑っているように見えて、「不謹慎だ」と電話がかかかります。

また、行政機関の日頃のお知らせは、市民対応する窓口の研修など内部の準備をして、受け入れ態勢が出来てからマスコミに報道してもらいます。ところが、このような時は、様々な被災者対策を被災者も一刻も「早く知りたい」マスコミも「知らせたい」といった状況になっています。こんなところから誤報も生まれます。

例えば、義捐金の配分についてこんな誤報がありました。1月30日のことでした。

県災害対策本部の記者発表は「義捐金の市町への送金日は、1月31日（火）とする。市町から被災者への配分は、被災状況が確認できるものからできるだけ早期に行う」というものでしたが、誤報では「31日から、緊急度の高い順に被災者へ公平に配分する。」というものでした。市民からの電話が殺到、窓口対応もパンク状態と混乱。小さなことも含めると本当にたくさんあります。こんなことの繰り返しであつという間に一日が過ぎてしまいます。

それでも、被災された方々に情報を届けることが、安心と冷静な行動につながるわけですからマスコミとのやり取りをやめる訳にはいきません。

マスコミには正確な情報の伝達をお願いする一方、市内に張り出した「災害対策広報紙」で確認して下さいと市民の方に説明することが大切でした。

外国のプレスも多くこられました。欧米メディアの質問の定番は、「政府に不満はあるか」「復興事業に外国資本の参入が可能か」などというものでした。ちょうどこの頃は政府レベルで外資の障壁問題があったのだと思いますが、答えに困りました。

話はがらっと変わります。まさに戦場ですから、マスコミとも連帯感が生まれます。

マスコミといっても、新聞、テレビ、ラジオ、雑誌、週刊誌など様々です。この中でも新聞メディアは日頃から記者クラブで顔見知りの方が多いため、つつい甘えてしまいます。

特にお世話になったのがお弁当。私達におにぎりが届いたのは3日目でした。しかもどこから来たのか、既に糸を引いて腐っていました。そんな光景を見た、記者の方たちは、私達に愛の手を差し伸べてくれたのです。

でも新聞社のお弁当にも、社によって差がありました。「なんと豪華な」と思えるお弁当から、「気の毒に」と思うお弁当まで。戦場での私達のささやかな楽しみ、それは、各新聞社のお弁当比較でした。某新聞社などは大阪のお弁当屋さんを駆けずり回って、船で神戸に運び込んでいたと聞きますから、そのロジスティックサポートシステムには感心します。

よく「命は食にあり」とか「空腹は無上のソース」といいますが、生存の基本はやはり食べることなのです。最近、スローフード、スローライフという言葉が耳にしますが、震災でのマスコミ体験はそのようなことまで教えてくれたと感謝しています。

14)

わたしのマスコミ体験—震災資料とマスコミ—

稲葉洋子

震災から3ヵ月後、神戸大学附属図書館では「震災資料を網羅的に集めて公開し防災に役立ててもらおう」と動き出しました。しかし、大学図書館が得意とする専門的な資料はともかく、ボランティア団体の資料や個人の方々を書いたり撮影した資料の集め方がいかにもわかりませんでした。市民の方に大学図書館の取り組みを知っていただくには広報しかない」と地元新聞社にお願いして新聞に掲載してもらったのが6月初旬。しかし、その時点では市民の方だけでなく新聞社を始めとするマスコミ自体が震災資料の収集・保存ということには無関心でした。ようやくマスコミが関心を持ち出したのは震災半年後の7月後半。この当時、震災資料を収集している機関は公共図書館を中心に10機関を超えていました。その頃に初めて地元新聞の社説で「大震災の記録を大事にしたい」と震災記憶の風化と資料の収集・保存の呼びかけがありました。

神戸大学では平成7年10月末に「震災文庫」を一般公開しましたが、その広報をマスコミ各社に依頼した10月初旬から震災資料について取り上げられるようになりました。図書館が大学や公共という垣根を越えて資料収集に協力するようになり、そのことにより一つの収集機関がマスコミに取り上げられますと他の機関も一緒に取り上げられるという相乗効果がありました。

しかし、今までマスコミの取材対象にされることのなかった図書館職員から見ますとその取材には時々首をかきしめることもありました。例えば図書館に来て資料の現物を見て自分で質問をして記事を書く方法は納得できます。が、その質問で多いのは「おもしろい資料は」「変わった資料はありませんか」です。次に増えたのが電話取材です。電話でも「おもしろい、変わった資料」が求められます。取材というものに慣れてきますと、私共の方で取り上げて欲しいものを用意しておくようになってきました。震災後1年、2年という節目の特集を組む場合にはじっくりと話す機会が持て、そのような時には記者が考えていることや図書館側が考えていることを出して合って共鳴していく期待感があります。しかしこれは稀な例で、取材もなしに他社の新聞記事を読んで書いたと思われる掲載記事にびっくりさせられることもあります。最近、記者が震災を長期的に取り

組もうとしても、これだけ事件や災害が多いと社内的にも「いつまで震災をやっているんだ」と言われるという話も聞きます。自分の周りで起きた事件や災害しか目や耳に入らない時代にはそのことが長く受け継がれていきますが様々な情報が飛び交う現代では難しいことかも知れません。私は一昨年から四国の大学に赴任していますが、神戸に戻った際、震災報道を今も継続しているマスコミがいくつかあることを発見し嬉しくなります。今年に関東大震災から80年、そして阪神・淡路大震災から丸8年です。関東大震災関係の資料は今も保存され利用者は増加しているそうです。災害資料の大先輩が「震災文庫」に継続の大切さを教えてくれます。おもしろいもの、変わったものを追いかけるだけでなく、マスコミ自身がポリシーを持って、いかに継続して報道していくかという姿勢が災害報道には大切なことではないでしょうか。

15)

地震マスコミ感想文

大津 俊

会場の人は身を乗り出し、食い入るような目で話を聞いてくれていた。「暗闇のゆれ、下敷きのつらさ、火の勢い、見殺しにした無念・・・」阪神大震災の生の姿を話す会場は、語る人・聞く人双方の熱気であふれていた。

実は、震災後の6月に仕事で上京すると、たくさんの同情の言葉を頂けたが、東京の人が崩れそうな建物や、狭い路地に平気で住んでいることに私は驚き、かえって同情した。次の関東大地震が目前だというのに「被災の生活臭は伝わっていないな」と直感した。東京の人は高速道路の倒壊と長田の火災を上空から写した映像しか見ていないので、震災を存在感のない別世界の事としてしか捉えていなかったのだ。

かねてよりマスコミ報道には不満を抱いていたが、事件の渦中に放り込まれて初めて気付いた。「絵になる」場面を繰り返して報道するだけで、市民の目線に立った絵が少ない。例えば家の中に立ち上がったクルーはいない。天地逆転した家の中を写せば、国民はすぐ理解できたはずだった。被害のむごさにカメラを向ける遠慮もあっただろうが、あの時市民はむしろ「この恐ろしさを世界に示してくれ」という気持ちで勝っていたはずだ。

関東人の無頓着に危機感を持った私は、被災住

民・建築家・医師等とグループを組んで「市民語り部キャラバン」に出かけた。震災から1年経って、やっと我々には語る勇気が湧いてきたのだ。震災の実態と復興状況を「口述メディア」で伝え、生活防災と自立救助を会場の人々と語り合って共に考えるのが目的であった。聴衆はやっと「リュックに何を入れようか」というレベルを超えてくれたと思う。いわば市民防災学事始めである。

震災の時、TVは新鮮な映像を見せてくれたが、10分程のニュースの繰り返しでは、同じ場面が眼に焼き付くだけで、内容の掘り下げはなかった。新聞記事は半日遅れだが、被害全体を鳥瞰的に見渡せ、事の大小を跡付けできた。周辺都市の被害も初めて知れた。ラジオは胸に入れて、土煙くさい町を救助で走り回るには便利だった。余震や爆発の情報にビクビクしながらきいていた。この経験から各メディアは各々の特徴があるのが初めて分かり、それを雑食するのが、精神の健康に良いことに気付いた。「1日30品目食べよう」とのスローガンのごとく、全メディアをバランスよく見分けて初めて健全な市民になれることも分かった。特に9・11テロ以降は、各国のメディアにも気配りしているが、これも震災で身についた知恵である。また爆破絵を見て、現場の気分を最もよく伝えるメディアは絵であることも、震災体験から知った。自分なりに工夫して、メディアと対等に付き合えるようになった。

(5) 成果のまとめ

—Memorial Conference in Kobe VIII からの提言—

Memorial Conference in Kobe VIIIは、2003年1月18日、神戸海洋博物館において、好天に恵まれ多数の参加者を得て開催されました。阪神・淡路大震災が持つ多様な側面について学び、震災について正しく理解し、異なる背景を持つ人々が語り合い、伝え合う努力を続ける試みも8年になりました。今年のメモリアル・コンファレンスの全体テーマは、「わたしのマスコミ体験」でした。証言募集を行い、応募していただいた中から、15の証言を午前中の会議で朗読していただきました。午後のパネルディスカッションでも、毎日放送の田中智佐子さんをコーディネーターにして「わたしのマスコミ体験」について語り合いました。

中川博志さんが吹く幽玄なバンスリーの音は会場を魅了しました。展示会場では、さまざまな団体の試みやその成果が展示されました。

今年の会議から得られた教訓は次のとおりです。

すなわち

1. 災害時にマスコミに対する人々の期待は大きい。しかも被災地の人はマスコミが真実を報道すると信じている。
2. 災害時にはマスコミ自体も被災し、「中心の空白、周辺の饒舌」という現象がおきる。
3. 「ペンは強い」。災害報道には人々の善意を集めさせ、夢をかなえさせ、傷つきたい人に救いをもたらす力がある。
4. 災害報道に接して、人々は「なぜ、だれとともに、だれのために」生きるのかを自問する。
5. マスコミは大きな悲しみを伝え、多くの人々の涙腺を揺さぶった。しかし、もっとたくさんあった小さな悲しみを伝えきることはできなかった。
6. マスコミの報道は現在のためだけではない。将来のために、記録された現在を保存し、人々に公開することも必要な活動である。
7. 被災地の人々のためのメディアと、被災地外の人々のためのメディアが必要であることを前もって想定し、マスコミはその準備をしておくべきだ。
8. 真っ白な心で「ともかく会いに行け」という取材の教訓の正しさを改めてマスコミ人は自覚すべきだ。
9. テレビの持つ迫真力と速報性、全体像を俯瞰させる新聞、機動性の高いラジオ、詳細なインターネット、それぞれのメディアの持つ特性を上手に組み合わせるすべを磨き、市民はそれらを雑食してメディアと対等に付き合うようになるべきである。

来年のMemorial Conference in Kobe IXは、2004年1月24日（土）、神戸において志を同じにする多数の参加者を得て「復興まちづくり」をテーマに開催いたします。

4. 災害対応研究会

4.1 概要

平成10年4月17日から、災害発生後の災害過程について体系的な理解を確立することを目的とし、毎年4回、セミナーを開催してきた。話題提供者は各回2名で、出席者は、毎回、当センターの関係教官をはじめ、行政の防災関係者、研究機関の教官、医療関係者、教育関係者、防災関係企業、NPO、マスコミ関係者等と多岐にわたり、活発な議論を重ねている。平成14年度の講演テーマは、「どのような危機に対しても一元的に対応できる危機管理体制を考

察する」ことであった。開催日時と講演者名及びタイトルは、以下の通りである。ただし、平成15年1月には、神戸国際展示場で行われた神戸市主催の「第7回震災対策技術展2003」に参加し、公開シンポジウム形式で研究会を執り行った。

4.2 開催日程

第1回<災害現場の教訓を学ぶ：大規模都市火災>

日時：4月26日14:00～17:00

講演者：瀬尾 理((株)ダスキン 総務本部渉外部・部長)

講演題目：天六ガス爆発災害と千日ビル火災を振り返る

講演者：細川 頤司(東京消防庁高輪消防署予防課・課長補佐)

講演題目：ホテルニュージャパン火災と新宿雑居ビル火災について

参加者数：32名

第2回 <池田小学校多数刺傷事件>

日時：7月26日14:00～17:00

講演者：甲斐達朗(大阪府立千里救命救急センター・副所長)

講演題目：池田小学校多数刺傷事件の緊急対応

講演者：岩切昌宏(大阪教育大学 教育学部 教養学科 発達人間学講座・講師)

講演題目：池田小学校多数刺傷事件後の児童および遺族の心のケア

講演者：秋月英男(箕面市教育委員会 教育推進部学校教育課・指導主事)

講演題目：池田小学校多数刺傷事件を契機とした箕面市教育委員会の対応

参加者数：46名

第3回<防災分野のソーシャルアントレプレナー>

日時：11月1日14:00～17:00

講演者：市川啓一((株)レスキューナウ・ドット・ネット・代表取締役)

講演題目：危機管理情報システムの現状と今後の展望

講演者：中村順子(NPO 法人コミュニティ・サポートセンター神戸・理事長)

講演題目：NPOによる大震災後の地域エンパワーメント

参加者数：51名

第4回

「災害対応研究会」公開シンポジウム

テーマ：911WTC 災害の徹底検証

日時：1月31日(金)13:00～16:00

場所：神戸国際展示場 3階 3A会議室

趣旨：災害は起こらないに越したことはない。しかし、万が一災害に襲われたとき、災害を切り抜け、社会の安定をとりもどす力を社会は必要とする。その力を「災害からの回復力」とよぶ。この研究会は災害からの社会の回復力の向上を目指して、阪神淡路大震災以来活動を続けてきた。これまでは「比較防災学ワークショップ」(本論文「5. 第3回比較防災学ワークショップ」参照)の一部として公開シンポジウムを開催してきたが、今年度は独立した時間を設けて、「平成13年度文部科学省科学技術振興調整費 緊急研究開発」を受けて研究を実施した2001年9月11日のニューヨーク・世界貿易センタービルの崩壊災害を取り上げて、災害対応の観点から活発な議論を行う。

プログラム：

13:00-14:30 平成13年度文部科学省科学技術振興調整費緊急研究参加者による報告

京都大学防災研究所 河田 恵昭

富士常葉大学環境防災学部 重川 希志依

横浜市立大学医学部 西村 明儒

京都大学防災研究所 田中 聡

アジア防災センター 西川 智

京都大学防災研究所 林 春男

14:40-16:00 パネル討論「WTC 災害を受けた新しい防災のすがた」

コーディネーター：

(株)コープラン代表 小林 郁雄

パネリスト：

京都大学防災研究所 河田 恵昭

富士常葉大学環境防災学部 重川 希志依

横浜市立大学医学部 西村 明儒

京都大学防災研究所 田中 聡

アジア防災センター 西川 智

京都大学防災研究所 林 春男

参加者数：約200名

●平成13年度文部科学省科学技術振興調整費 緊急研究開発等「米国世界貿易センタービルの被害拡大過程、被災者対応等に関する緊急調査研究」成果報告書は、

<http://infoshako.sk.tsukuba.ac.jp/~toshiw3/Labo/murao/wtc/>でもご覧いただけます。

5. 第3回比較防災学ワークショップ

ー みんなで防災の知恵を共有しようー

3rd Workshop for "Comparative Study on Urban Earthquake Disaster Management"

5.1 開催趣旨

阪神・淡路大震災をはじめ、米国・ノースリッジ、台湾・集集、トルコ・マルマラ地震災害による都市地震災害、2001年の911WTCテロ災害や国内での有珠山、三宅島、雲仙・普賢岳などの噴火災害、1998年と1999年の全国的な氾濫災害と土砂災害に見られるように、被害様相は国や地域によって大きく異なる特徴をもっている。そこで、すでに実施してきている都市地震災害に関する日米共同研究を核として、特に災害の社会的側面に焦点を当てたワークショップを毎年1月、または2月に神戸で開催する。第1回比較防災学ワークショップは神戸国際展示場で、2001年1月18日・19日に、第2回は、神戸国際会議場で2002年2月14日・15日開催したのに引き続き、今年度は、神戸国際展示場で、第3回を2003年1月30日～31日に開催した。

また、本ワークショップは以下のような5つの特色および意義をもつものである。

(1)従来のワークショップと違い、講演を中心とするのではなく、広く会場から意見の提出を求め、それを集約するやり方で会場運営し、全参加者の能力向上を目指すユニークな試みである。

(2)比較防災学に関するワークショップは世界で初めての開催であり、21世紀の初めにそれを開催するインパクトは大きい。

(3)会場が毎年、同じ場所に固定されており、継続性の高いワークショップである。

(4)メモリアル・カンファレンス・イン神戸(本論文「3. Memorial Conference in KobeⅧの開催」参照)とセットで、1つの震災記念事業と位置づけられる。

(5)研究者のみならず、行政の防災担当者、災害情報分野の民間企業の社員などが、これまでになかったオープンな雰囲気活発な意見交換ができる。

5.2 開催日時

2003年1月30日(木)10:00～31日(金)12:00

5.3 開催場所

神戸国際展示場 3階 3A会議室

5.4 プログラム

●2003年1月30日

10:00

開会挨拶

京都大学防災研究所 河田 恵昭

日米共同研究領域代表挨拶:

(独)防災科学技術研究所 地震防災フロンティア研究センター長・亀田弘行

10:10-12:00

「日米共同研究による都市地震災害の軽減(領域代表:亀田弘行(独)防災科学技術研究所 地震防災フロンティア研究センター長)」の計画研究、「地震災害に関する危機管理の比較防災論的研究」の米国側研究成果の報告

(1) Kathleen Tierney, Disaster Research Center, University of Delaware

Conceptualizing and Measuring Organizational and Community Resilience: Lessons from the Emergency Response Following the September 11, 2001 Attack on the World Trade Center

(2) Victor Argothy, Disaster Research Center, University of Delaware

Perceptions on Acceptable Levels of Performance of Different Elements in the Built Environment in the Event of a Major Earthquake

(3) Kimberley Shoaf, Center for Public Health and Disasters, UCLA

Adapting Engineering-Based Earthquake Casualty Modeling For Health Planning

(4) Cary Sauter, Center for Public Health and Disasters, UCLA

Damage to personal household belongings as a predictor of injury and death in the 1995 Hanshin-Awaji Earthquake

13:30-16:00

「日米共同研究による都市地震災害の軽減(領域代表:亀田弘行(独)防災科学技術研究所 地震防災フロンティア研究センター長)」の計画研究、「地震災害に関する危機管理の比較防災論的研究」の日本側研究成果の報告

(1) 目黒公郎・東京大学生産技術研究所

都市の安全性と総合的地震防災力を高めるためのハードとソフト

(2) 下田渉・京都大学防災研究所

体系的な震災理解のための参加型認識共有システムの構築

(3) 岩崎信彦・神戸大学文学部

大都市震災における通勤者の避難問題について一昼間に大地震が大阪市を襲った場合

(4) Srikantha Herath, UNU

A field data collection system for disaster reduction

(5) 塩野計司・長岡高等工業専門学校

兵庫県南部地震による神戸市での死者数<木造住宅の更新過程が事実とはちがっていたら；仮想の構築環境下で期待される死者数と実際の死者数の比較

(6) 田中哮義・京都大学防災研究所

善光寺地震における稲荷山宿火災について

(7) 立木茂雄・同志社大学文学部

阪神・淡路大震災の災害体験からの心理的復興過程のモデル化：2003年1月実施の第2回兵庫県被災者パネル調査における復旧・復興感測定のための予備的研究

(8) 河田恵昭・京都大学防災研究所

21世紀COEプログラムと防災研究

●2003年1月31日

10:00-12:00

講演・パネルディスカッション

「長期的な復興過程を日米で比較する-1994年ノースリッジ地震と1995年阪神淡路大震災からの復旧復興」

講演者: Robert B. Olshansky, Associate Professor, Associate Head, Department of Urban and Regional Planning, University of Illinois (イリノイ州立大学)

パネリスト:

神戸大学都市安全研究センター教授・室崎益輝

神戸大学工学部助教授・大西一嘉

大阪大学工学研究科助教授・小浦久子

(株)コープラン代表・小林郁雄

Laurie A. Johnson, Vice President, Risk Management Solutions, Inc.

京都大学防災研究所客員教授・Kenneth C. Topping

5.5 研究成果

(1) 日米他外国からの参加者を含め、約150名が参加した。

(2) 日米共同研究の一環として、日米双方の研究者が行っている研究内容を相手側に紹介し、研究上有益な情報交換を行った。

(3) 日米の防災のあり方の比較をテーマとしたシンポジウムを開催し、両国の防災が持つ共通点と相違点を明確化した。

(4) 研究成果の詳細については、第3回比較防災学ワークショップ Proceedings を参照下さい。

6. データベース “SAIGAI”

6.1 背景

巨大災害研究センターでは、その前進である旧防災科学資料センターの設立当初より、国内における災害史資料の収集・解析を行い、これらの資料をもとに比較災害研究、防災・減災などに関する研究を実施してきた。これらの実績を踏まえて、昭和57年度よりデータベース “SAIGAIS” を構築し、旧防災科学資料センター所蔵の論文ならびに災害関連出版物を登録してきた。この “SAIGAIS” は、平成元年度に科学研究費（研究成果公開促進費）の補助を受けて全国的な文献資料情報データベース “SAIGAI” として拡充された。現在、本センターを中核として、全国各地資料センター（北海道大学・東北大学・埼玉大学・名古屋大学・九州大学）の協力のもとでその構築作業が継続されている。登録されているデータは、平成15年3月現在で7万7千件程度に達している。文献検索に資するため、昭和58年に科学研究費・特別研究「自然災害」の補助を受けて「自然災害科学キーワード用語集」が刊行された。さらに平成6年には、キーワードの追加・体系化を行った改訂版が「自然災害科学キーワード用語・体系図集」が刊行された。

6.2 データベースシステムの概要

データベース “SAIGAI” の検索サービスは、平成2年3月より京都大学大型計算機センターのデータベースへ移行しており、大学間ネットワーク（N1システム）に加入している大学であれば、日本語端末を用いて資料の検索が可能であった。しかし、最近の情報通信環境の発展に伴いワークステーションやパーソナルコンピュータを用いた検索が増えており、より直感的な検索システムの導入に対する要望が強くなっていた。すなわち、従来のコマンドを主体としたキャラクター・ユーザー・インターフェース（CUI）ではなく、webサービスなどを利用したより操作性の高いグラフィカル・ユーザー・インターフェース（GUI）による検索方法の実現が期待された。このような要望を受け、平成10年度における巨大

災害研究センターのホストコンピュータ更新では、グラフィックス処理能力の極めて高いシリコングラフィックス社製 Onyx2 を中心としたデータベースシステムを導入した。新検索システムは WWW 上に構築され、各ユーザーはパーソナルコンピュータなどの web ブラウザから自由にアクセスが可能となっている。なお、データベース“SAIGAI”には、巨大災害研究センターのホームページ (<http://www.drs.dpri.kyoto-u.ac.jp>) からリンクがはられている。

6.3 新データベースシステムへの移行

従来の CUI による検索システムも並行してサービスを行っているが、利用者のほとんどは web ブラウザを利用したアクセスに移行している。このように GUI による検索システムの利用者が増加するに伴い、データベースシステムへの意見や要望が多数寄せられ、システムの問題点および改善点が明確になってきた。また、ホストコンピュータの機種更新が平成 14 年 3 月に実施されたため、これと同時にデータベースシステムの再設計を行った。

新たに導入したデータベースシステムの旧システ

ムからの主な改善点は次の通りである。複雑過ぎるとの指摘があった検索方法を簡略化し、要望の多かった全文検索サービスを実現した。検索結果の表示方法についても見直しを行い、情報の見やすさと再利用のしやすさを向上させた。新規データの入力システムについては、既データとの互換性を完全に保ちながら入力項目の再設計を行った。さらに入力方法としては、誤使用の多かった専用アプリケーションに換えて、Web ブラウザを用いた WWW による入力、ファイルメーカー社 FileMaker Pro のテンプレートによる入力を採用した。

データベースシステムの新規導入に合わせて、データ自体の見直しも行った。従来は災害に関する書誌情報のみを提供してきたが、新たに災害に関する史料データも検索対象に追加することとした。この災害史料は巨大災害研究センターが長年蓄積してきたデータで、日本書紀や続日本書紀等の古文書から災害に関する記述を抽出し、時期や地域、災害の種類等についてまとめたものである。現在は現代語訳を加える作業とデータベースシステム構築を並行して行っており、平成 16 年度中のサービス開始を予定している。

Information Analysis in the Field of Natural Disaster Science (30)

Yoshiaki KAWATA, Takeyoshi TANAKA, Haruo HAYASHI,
Katsuya YAMORI, Tomoyuki TAKAHASHI*, and Hirokazu KAWAKATA

*Faculty of Engineering and Resource Science, Akita University

Synopsis

The objectives of this paper are to present the activities of the Research Center for Disaster Reduction Systems. They are systematically organized by not only our staff members but also many researchers and practitioners who did voluntary work in some workshops and symposiums. Open symposium are held monthly and many graduate students attended every time. The 8th Seminar for Regional Disaster Prevention Plan was held to contribute loss reduction managed by local government officers. We had Memorial Conference in Kobe VIII. The topics of the scene were recorded by video and after that we distributed to disaster related organizations. The compositions written by the victims who experienced some contact with mass media or had some opinion on their activities were kept permanently at the Disaster Reduction and Human Renovation Institution which was established in April, 2002. The 3rd Workshop on Comparative Disaster Studies was held to make advance of Japan-US urban earthquake disaster reduction studies and other contribution in the field of disaster management by local government.

Keywords: Great Hanshin-Awaji earthquake disaster, database, catastrophic disaster, comparative disaster studies, seminar, workshop